

性別を「その他」と回答する人は みな性的マイノリティなのか？

—ジェンダー統計の精緻化に向けたクィア人口学的分析¹⁾—

平 森 大 規

本稿では、ジェンダー統計の充実にあたっては性的指向・性自認のあり方(SOGI)の視点が重要であるという立場から、日本の人口学分野でこれまで実施されてきた無作為抽出調査におけるSOGI測定法の方法論的研究を概観する。また、最新の実験的モニタ型ウェブ調査の結果から、性別を「その他」と選んだ回答者の約半数がシスジェンダー女性であったことを示し、男女に次ぐ性別の第3の選択肢として「その他」という文言を利用することの限界についても考察する。

キーワード：ジェンダー統計，クィア人口学，性別欄，性的マイノリティ(LGBTQ)

1. はじめに

従来、ジェンダー統計の分野においては、性別は男性または女性の2つしか存在しないという性別二元論が暗に前提とされることがほとんどだった。しかしながら、近年、男性・女性に限らない多様な性別が可視化される中で、性の多様性を考慮に入れたジェンダー統計の重要性が指摘されつつある(杉橋2023; 岩本2024; 釜野2024)。そこで、本稿ではまずジェンダー不平等の問題を考えるにあたって、性的指向・性自認のあり方(sexual orientation and gender identity, SOGI)の視点がいかに有意義であるかを示し、次に無作為抽出調査をはじめとする量的調査でSOGIをどのようにたずねるかに関する方法論的研究を紹介する。最後に、性的マイノリティ、特に男性でも女性でもない

性自認を持つ人への配慮として性別欄に男女に次ぐ第3の選択肢として追加されることが増えてきた「その他」に関する実験的モニタ型ウェブ調査の結果を検討し、ジェンダー統計を精緻化させる上での現時点におけるベストプラクティスを提示する。

なお本稿では、性的指向をどの性別に性愛感情が向くか、性自認を本人が自分自身はどの性別であるという持続性のある自己認識（アイデンティティ）を持っているか、性自認のあり方を性自認と出生時に割り当てられた性別の関連のあり方という意味で使用し、性的指向におけるマイノリティ（セクシュアル・マイノリティ）と性自認のあり方におけるマイノリティ（ジェンダー・マイノリティ）を合わせて性的マイノリティと呼ぶ（釜野 2020）。

2. ジェンダー不平等と SOGI に基づく不平等の関連性²⁾

一見、SOGIに基づく不平等はあくまで性的マイノリティに関わる事柄で、SOGIに基づく不平等は特にジェンダー不平等と関係しないと思われるが、SOGIに基づく不平等の発生要因にはジェンダー不平等が大きく関わっている。たとえば、性的指向に基づく賃金格差研究のメタアナリシスによると、ゲイ男性は異性愛男性に比べて賃金が低く（ゲイ・ペナルティ）、レズビアンは異性愛女性に比べて賃金が高い（レズビアン・プレミアム）ことが明らかになっており、これらの状況について3つの理論的説明がなされているが（Klawitter 2015）、いずれの理論的説明もジェンダーと深く関係している。

1つ目の理論的説明はセクシュアル・マイノリティに対する差別である。つまり、教育達成や経験年数など賃金に影響する他の要素を考慮に入れても賃金が異性愛者よりも低いならば、それは雇用主による差別のあらわれとみなせるだろうという説明である。同性愛者差別の背景には、たとえばゲイ男性は「女々しい」「なよなよしている」など「男らしさ」に欠けているというステレオタイプがあることが知られており（Diefendorf and Bridges 2020）、性的指向がジェンダー化されていることが理解できる。

2つ目の理論的説明は人的資本理論に基づくものである。現在の配偶者の性別や、現在単身者の場合、将来の配偶者の性別を考慮に入れたキャリア設計を考えると、レズビアンは男性配偶者の収入に頼れる異性愛女性とは異なり経済的に自立しないといけなため、異性愛女性と比較して多くの人的資本を蓄積し高収入である一方、ゲイ男性は女性配偶者の収入に頼れない異性愛男性とは異なり同性の配偶者に経済的に頼ることができるため、異性愛男性と比較して少ない人的資本を蓄積し低収入であるという説明ができる。このように配偶者

の性別によって人的資本の蓄積度合いが異なるのはそもそも性別による賃金格差があるからであり、この理論的説明についてもジェンダーの要素抜きでは考えることができないことがわかる。

3つ目の理論的説明は世帯内のダイナミクスに関するものである。性別役割分業の度合いが同性カップルでは異性カップルと比べて低いため、レズビアンは異性愛女性に比べて家事や育児等の負担が相対的に少ない一方で、ゲイ男性は異性愛男性に比べてそのような負担が相対的に多い。このような背景から、レズビアンは異性愛女性に比べて賃金が高い一方で、ゲイ男性については異性愛男性に比べて賃金が低いとされる。つまり、性的指向による賃金格差の要因の1つとして異性カップルと同性カップルにおける性別役割分業の度合いが異なることがあり、これについてもジェンダーと深く関係していることがわかる。

上記でみられたようなジェンダー不平等との関連性については、性的指向に基づく賃金格差のみならず性自認のあり方に基づく賃金格差³⁾においてもみられる。たとえば、トランスジェンダーの経済的困難については多くの研究で確認されているが (Carpenter et al. 2020 など)、オランダの政府統計を利用した性別移行と賃金に関する研究によると、トランスジェンダー女性は性別移行に伴い賃金が減る一方で、トランスジェンダー男性にはそのような賃金の減少はみられないことがわかった (Geijtenbeek and Plug 2018)。この研究では女性であることの賃金ペナルティを7%、性別移行することの賃金ペナルティを10%と推定しており、性別の法的登録を男性から女性に変更した場合は、女性ペナルティおよび性別移行ペナルティが重なることで賃金の減少がみられる一方、性別の法的登録を女性から男性に変更した場合は、男性であることによる賃金プレミアムと性別移行ペナルティが相殺される形となり、賃金の減少がみられないことがわかった (Geijtenbeek and Plug 2018)。そのため、この研究でみられているトランスジェンダー男性とトランスジェンダー女性の性別移行に伴う経済的状況の差異はジェンダー不平等から来ていることがわかる。

このように、SOGIの視点から研究を進めることは性的マイノリティとそうでない人との不平等を理解するために役立つだけでなく、ジェンダーによる不平等を理解するためにも意義があることがわかった。それでは、ジェンダー統計を精緻化するためには量的調査でSOGIをどのようにたずねればよいのだろうか。

3. 量的調査における SOGI 測定法に関する方法論的研究

近年、性的マイノリティに対する社会的・学術的関心の高まりから、性的

マイノリティの人口割合や生活状況を定量的に把握したいという要望がみられる。既存の性的マイノリティに関する経験的研究は質的調査を用いるものが大多数であるものの、性的マイノリティを主な対象者とするアンケート調査や性的マイノリティに関するモニタ型ウェブ調査についてはある程度蓄積されてきた。しかしながら、これまで行われてきた量的調査では、性的マイノリティとそうでない人との統計的な比較を代表性のある同一のデータで行うことが困難である。このような既存研究の課題を乗り越えるためには、回答者のSOGIを把握できる無作為抽出調査が必要である。無作為抽出調査でSOGI設問を含めるにあたっての大きな課題として、SOGIに関する用語になじみのない性的マイノリティ非当事者が回答者の多くを占めるような調査で、いかにしてSOGIを捉える質問をたずねるかという点が挙げられる。このような方法論的検討は日本では前例がないため、人口学的設問を一から作り上げる必要があった。

そこで、筆者らの研究グループで方法論的研究を実施し、以下のようなモデル設問を導出した。方法論的研究の詳細についてはすでにさまざまな論文等で既出のため本稿で繰り返すことはしないが（Hiramori and Kamano 2020; 平森ほか 2023など）、性的指向（アイデンティティ）^{4）}の設問における選択肢「その他」に関する結果および欧米の知見とは異なる発見があった「3ステップ方式」による性自認のあり方のたずね方の2点についてのみ詳しく説明する。なお、問54「今の認識にもっとも近い性別」にある3番目の選択肢については、方法論的研究の結果を公表した当初は「その他（具体的に：）」という文言を使用していたが、その後の再検討を踏まえて「男性・女性にあてはまらない（具体的に：）」に変更した。以下に示しているモデル設問は変更後のものである（釜野ほか 2023: 3）。

性的指向（アイデンティティ）の設問

問 55 次の中で、あなたにもっとも近いと思うものに○をつけてください。（○は1つ）

- 1 異性愛者、すなわちゲイ・レズビアン等ではない [異性だけに性愛感情を抱く人] >.....
- 2 ゲイ・レズビアン・同性愛者 [同性だけに性愛感情を抱く人] >.....
- 3 バイセクシュアル・両性愛者 [男女どちらにも性愛感情を抱く人] >.....
- 4 アセクシュアル・無性愛者 [誰に対しても性愛感情を抱かない人] >.....
- 5 決めたくない・決めていない > ①へ
- 6 質問の意味がわからない > 問56へ

加えて、日本においては、欧米諸国で使用されている出生時に割り当てられた性別と性自認の2問でトランスジェンダーかそうでないかを分類する「2ステップ方式」は回答が難しく、出生時に割り当てられた性別（上記モデル設問における問53）・性別違和感（問54）・性自認（問54枝問）をたずねる「3ステップ方式」のほうがよいことがわかった。性別をたずねる際に3ステップ方式を用いる1つ目の利点として、性別のどの側面についてたずねられているかが明示的に書かれている点が挙げられる。既存の性別質問では、性自認と出生時に割り当てられた性別は一致しているのが当然という暗黙の前提があり、トランスジェンダーが性別を記入するたびにこれは現在の戸籍上の性別を書くべきなのか、性自認を書いてもよいのか、などと記入者側が判断するストレスが発生する。また、2つ目の利点として、性自認に関する質問があることが挙げられる。既存の性別質問では、回答者が性別欄に出生時に割り当てられた性別を書くことが求められていると判断した場合、性自認と異なる性別を記入しなければならないという心理的苦痛がある。これらの問題点は、3ステップ方式を用いることで軽減される。

とはいえ、本来は調査テーマにかかわらず性的指向に関する設問や3ステップ方式を用いた性自認のあり方に関する設問を含めることが望ましいが、回答者がトランスジェンダーであるかどうかの情報を収集できない、または何らかの理由で収集しないというケースも考えられる。このような場合に、性別を1ステップでかつ包括的にたずねる方法はないのだろうか。現在、欧米諸国をはじめとする諸外国のみならず日本においても、性別質問の選択肢に男女しかないのは排他的であるという認識が増えつつある。その一方で、さまざまな調査で「その他」「答えたくない」「無回答」をはじめとする、男女に次ぐ第3の選択肢をどのようにたずねるかに関する模索が行われているが、この点について精査する方法論的研究は限られている。調査者の「良心」のみに基づいて方法論的な検討はなされないまま、男女に次ぐさまざまな選択肢が調査に導入されているのが現状である。

4. 性別欄における選択肢「その他」に関する方法論的研究

上記で述べたように、近年、調査の性別欄において男女以外の選択肢を導入する動きが広がっている。たとえば、都道府県主体の調査における性別欄を検討した研究報告によると、検討対象となった47個の調査のうち、28個の調査において男女以外の選択肢があった（釜野 2022）。28個のうち、「その他」が追加されていたのは9個、「無回答」は5個、「回答したくない」は2個、「答え

たくない」は4個であった。また、「その他」と「答えたくない」など複数の選択肢や自由記載欄が追加されている調査などもみられた(釜野 2022)。このように、男女以外の選択肢が必要だという認識は広がっている一方で⁵⁾、男女に次ぐ第3の選択肢としてどのような文言を用いるのが適切なのかなど、性別欄に関する方法論的研究はほとんど進んでいない(例外として、インテージ 2020; 前之園 2022; 宮下 2022 など)。

そこで本稿では、三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社(MURC)による自主研究企画「性別等の把握方法の調査研究」(共同参加:科学研究費プロジェクト「性的指向と性自認の人口学の構築——全国無作為抽出調査の実施」(JSPS KAKENHI Grant Number JP21H04407)、アンケート調査協力:株式会社クロス・マーケティング)で実施された実験的モニタ型ウェブ調査の結果から、男女に次ぐ第3の選択肢として現在広く使用されている選択肢である「その他」に関わる部分を取り上げる。なお、筆者は共同参加メンバーとしてMURCによる自主研究企画に携わっている。また、本稿で紹介する内容はあくまで現時点での速報値であり、今後より詳細な分析を行った結果、数値等に変動が生じる可能性があることに留意が必要である。企画全体としての目的は、アンケート調査において性別をどのようにたずねるかに関するスタンダードが確立されていないことから、さまざまな性別のたずね方に関して回答しやすさ、抵抗感、設問の適切さ等についてヒアリング調査および実験的モニタ型ウェブ調査を通じて検討することである。ヒアリング調査については2022年9-10月、実験的モニタ型ウェブ調査については2023年2月に実施された。ヒアリング調査を含めた調査全体の結果については、今後MURCウェブサイトにて公表予定である(公開時期未定)。

実験的モニタ型ウェブ調査では、調査会社が保有するモニタ登録者を性別(モニタ登録時の性別を使用)、年齢、居住地の分布をできるだけ揃えた上で、A群、B群、C群の3群にランダムに分けて配信を行った。A群ではスクリーニング時に1ステップ方式(質問文:「あなたの性別をお選びください。」、選択肢:「男性」、「女性」、「その他」)で性別をたずね、B群ではスクリーニング時に2ステップ方式(出生時に割り当てられた性別、性自認)で性別をたずね、C群ではスクリーニング時に3ステップ方式(出生時に割り当てられた性別、性別違和感、性自認)で性別をたずねた。スクリーニング後の本調査では年齢、居住地、性別、性自認、性的指向、各テスト項目検証のための設問、その他マーケティング指標や人口学的属性に関する設問をたずねた。本稿では、ウェブ調査結果のうちA群とC群の結果に着目する。

まず、1ステップ方式でスクリーニングを行った後に本調査で3ステップ方

式による設問をたずねたA群の結果を示す。表1によると、1ステップ方式で「その他」と回答した人のうち、シスジェンダー女性が51.3%、トランスジェンダーが41.0%、シスジェンダー男性が7.7%である。ここから、性別を「その他」と回答する人はみな性的マイノリティ（特にトランスジェンダー）であるとは限らないことが明らかになった。

表1 1ステップ方式による性別にみた3ステップ方式による性別の分布

(%)		1ステップ方式による性別			
		男性	女性	その他	全体
3ステップ方式 による性別	シスジェンダー 男性	95.6	0.6	7.7	47.2
	シスジェンダー 女性	0.4	94.6	51.3	47.8
	「別の性別だととら えている」または 「違和感がある」	4.0	4.8	41.0	5.0
	n	1,237	1,252	39	2,528

つぎに、3ステップ方式でスクリーニングを行った後に本調査で1ステップ方式による設問をたずねたC群の結果を示す。表2によると、3ステップ方式で「別の性別だととらえている」または「違和感がある」と回答した人のうち、1ステップ方式で「男性」を選んだ人は25.3%、「女性」を選んだ人は51.1%、「その他」を選んだ人は23.6%である。ここから、トランスジェンダーである

表2 3ステップ方式による性別にみた1ステップ方式による性別の分布

(%)		3ステップ方式による性別			全体
		シスジェン ダー男性	シスジェン ダー女性	「別の性別だと とらえている」 または「違和感 がある」	
1ステップ方式 による性別	男性	99.3	0.5	25.3	43.8
	女性	0.5	98.8	51.1	54.2
	その他	0.2	0.7	23.6	2.0
	n	1,151	1,397	182	2,730

からといって、必ずしも性別を「その他」と回答するとは限らないことが明らかになった。なお、トランスジェンダーの中には性自認が男性であるトランスジェンダー男性や性自認が女性であるトランスジェンダー女性が含まれていることから、トランスジェンダーだからといって必ず選択肢「その他」を選ぶわけではないのはある意味当然であると考えられる。

5. おわりに——（シス）ジェンダー統計から SOGI の視点を含む包摂的なジェンダー統計へ

本稿では、まず SOGI の視点がいかにジェンダー不平等の問題と分かちがたく結びついているかを示し、次にこのような視点を活かすべく SOGI を量的調査で測定するための方法論的研究を紹介した。また、近年調査の性別欄で男女に次ぐ第3の選択肢として用いられることが増えている「その他」に関する実験的モニタ型ウェブ調査の結果から、性別欄における「その他」という選択肢は男女以外の性別であると認識している人のみに選ばれるとは限らないということを示した。

本調査における性別欄で「その他」を選んだ回答者のうち、3ステップ方式でシスジェンダー男性またはシスジェンダー女性と分類される人が6割程度いた（特に「その他」選択者のうち約半数はシスジェンダー女性回答者だった）背景としては以下のような可能性が考えられる。たとえば、必ずしも性別違和感はないものの、社会における女性役割への嫌悪が影響している可能性がある。また、調査において性別をたずねるべきではないという考えを持つ回答者が設問への抵抗を示すために「その他」を選択した可能性もある。本調査では「その他」を選んだ背景についてはたずねていないが、この選択肢を選ぶ回答者の持つ人口学的特徴を把握することのできない現在の状況下では、仮に選択肢「その他」を追加したとしても意味のある結果の解釈が困難になる。また、これらの実務的な困難に加えて、「その他」という文言が男性・女性にあてはまらない性別を持つ回答者を他者化するため望ましくないという指摘もある（釜野 2024）。

従来ジェンダー統計の分野においては、自らの学問領域をジェンダー統計と位置づけつつも実際はシスジェンダーを前提とした議論がなされ、トランスジェンダーについてはその名にジェンダーという語が含まれているにもかかわらず伝統的にジェンダー統計の射程外として扱ってきた。このような状況の中で、既存の性別二元論に基づく（シス）ジェンダー統計から SOGI の視点を含む包摂的なジェンダー統計への発展の一貫として、量的調査において SOGI を

たずねることは意義があると考えられる。また、3ステップ方式ではなく1ステップ方式で性別をたずねる場合には、社会科学分野で行われる量的調査については原則的に性別として性自認や生活上の性別などをたずねるべきであるが、性別のどの側面をたずねるのかを明記することが最も重要である。1ステップ方式で出生時に割り当てられた性別のみをたずねる際には、トランスジェンダーに強い心理的苦痛をもたらすことを踏まえ、なぜ性自認や生活上の性別を含めた性別の他の側面ではなく出生時に割り当てられた性別をたずねる必要があるかを丁寧に説明し、回答者の理解を得ることが求められる。これまで調査者の多くは性自認、生活上の性別、現在の戸籍上の性別、出生時に割り当てられた性別などを区別せず、これらがすべて一致しているという前提の元に調査を行ってきたが、自らが調査で測定したいのは性別のどの側面なのかについて理論的に考察し、性別をたずねる目的を明確にすることが必要である（西尾ほか2023）。

上記の知見を踏まえ、本稿ではジェンダー統計を精緻化させる上での現時点におけるベストプラクティスとして、

- (1) 筆者らの研究チームが導出したモデル設問を用いてSOGIをたずねること（上記p.55-56参照）
- (2) 回答者がトランスジェンダーであるかどうかをたずねない場合については、性自認や生活上の性別など、性別のどの側面を測定する設問であるのかを明記した上で選択肢を「男性」、「女性」、「男性・女性にあてはまらない（具体的に：）」とすること

を推奨する。

近年、性的マイノリティへの配慮として量的調査では性別をたずねるべきでないといった誤解が広がっているが、求められているのは安易な性別欄の一括削除ではなく、調査倫理や測定誤差の観点から性別欄を精緻化させることである。本稿では、ジェンダー統計におけるSOGI視点導入の意義を説明しつつ、性別欄の精緻化に向けて人口学分野でこれまで行われてきたSOGI測定法に関する研究を紹介し、実験的モニタ型ウェブ調査のデータを用いて、性別欄「その他」を選ぶ回答者にはシスジェンダー女性が多く含まれるという結果を示した。男女に次ぐ第3の選択肢として「その他」を追加する背景には包摂性への配慮があると考えられるが、今後はジェンダー統計の精緻化に向けた理論的・経験的研究が必要である。たとえば、本稿で使用した実験的モニタ型ウェブ調査による結果はあくまで調査会社が保有するモニタ登録者からの回答に基づいているという限界があるため、同様のテーマについてさまざまな調査手法を用いて研究を進めていくことで、結果の確からしさを高めていくことができるだ

ろう。また、性別欄の「男性」「女性」「その他」という選択肢のうち「その他」を選ぶ回答者について質的調査法を用いてその背景要因をたずねる研究などは、単に性別欄の改善につながるだけでなく、広く社会におけるジェンダー規範を理解する上で意義があるのではないかと考えられる。このような研究は「社会における異性愛・シスジェンダー中心主義を問題化すべく SOGI 別人口割合の推定や人口学的特徴を示しつつ、同時にその把握過程における SOGI カテゴリーの非規範的・流動的な側面を記述し、ある人口が集団として社会的に構築されていることを前提に研究を行う」(平森ほか 2023: 22) クィア人口学的な発想に基づく研究とみなすこともできるだろう。

また、本稿では無作為抽出調査をはじめとする量的調査における性別欄に議論を限定したが、履歴書や保険証などの各種書類に存在する性別欄に起因するさまざまな困難がトランスジェンダーから寄せられている。たとえば、就職活動時に履歴書に生活上の性別を記載したところ「詐欺」と言われたり、公的書類に記載されている性別と外見上の性別が異なることから行政サービスや民間サービスを受けることができなかつたりしている (LGBT 法連合会 2019)。このような状況を受けて、ジェンダー不平等を記述するのに必要不可欠なジェンダー統計と性別欄によるトランスジェンダーの困難への考慮は両者ともに必要であるという立場から、これらのバランスを取る方法についても検討が行われはじめている。具体的な対処法として「【対処法1】 個人の情報は非公開 (性別はデータとしてとるが、個々人のデータは公開しない) [略] 【対処法2】 副次的書類のみ性別欄を削除 [略] 【対処法3】 全数調査から抽出調査へ [略] 【対処法4】 データマッチング (名寄せ) による情報取得」(岩本 2024: 36-37) といった方法を紹介している論考もある。今後、既存の性別二元論に基づく (シス) ジェンダー統計から SOGI の視点を含む包摂的なジェンダー統計へと発展するにあたっては、すべての書類に形式的に性別欄を入れるという姿勢でも機械的にすべての性別欄を削除するという姿勢でもなく、一定の原則に沿いつつ個別のケースに即して丁寧に検討する姿勢が求められている。

(ひらもり だいき 法政大学)

[注]

- 1) 本稿は、国際ジェンダー学会 2023 年大会シンポジウム「ジェンダー統計を考える」で筆者が行った報告に基づいている。なお、本稿は JSPS 科研費 JP21H04407, JP22K20202 の助成を受けている。
- 2) 性的指向と賃金の関連性に関する既存研究の包括的レビューおよび日本におけ

- る無作為抽出調査を利用した分析結果についてはHiramori (2022)を参照のこと。
- 3) 性自認のあり方と賃金の関連性に関する既存研究の包括的レビューおよび日本における有意抽出調査を利用した分析結果については岩本ほか (2019) を参照のこと。
 - 4) 一般に性的指向にはアイデンティティ、惹かれ (attraction)、行動の3側面があると言われている (Hiramori and Kamano 2020)。これらの側面のうち、本稿ではアイデンティティを測定する設問を取り扱う。
 - 5) 調査実施上におけるトランスジェンダーに対する配慮の必要性を指摘しつつ、オーストラリア統計局による選択肢「その他」に関する方法論的研究の結果を示した上で、非標本誤差の大きくなる「その他」を加えるのではなく、『男性・女性』を提示して無回答を容認する、可能にすることが妥当 (井田 2018: 25) と主張している論考もみられる。

[引用文献]

- Carpenter, C. S., S. T. Eppink, and G. Gonzales 2020 Transgender Status, Gender Identity, and Socioeconomic Outcomes in the United States. *ILR Review*, 73(3), 573-599
- Diefendorf, S. and T. Bridges 2020 On the Enduring Relationship between Masculinity and Homophobia. *Sexualities*, 23(7), 1264-1284
- Geijtenbeek, L. and E. Plug 2018 Is There a Penalty for Registered Women? Is There a Premium for Registered Men? Evidence from a Sample of Transsexual Workers. *European Economic Review*, 109, 334-347
- Hiramori, D. 2022. Sexuality Stratification in Contemporary Japan: A Study in Sociology. PhD dissertation, Department of Sociology, University of Washington
- Hiramori, D. and S. Kamano 2020 Asking about Sexual Orientation and Gender Identity in Social Surveys in Japan: Findings from the Osaka City Residents' Survey and Related Preparatory Studies. *Journal of Population Problems*, 76(4), 443-466
- 平森大規・釜野さおり・小山泰代 2023 「性的指向と性自認のあり方 (SOGI) と家族研究——量的調査を通じた試み」『家族研究年報』48, 5-25
- 井田潤治 2018 「性別質問と性同一性障害・性別違和」『日本世論調査協会報「よろん」』121, 19-26
- インテージ 2020 「多様な性自認を尊重する調査設計とは？」知るギャラリー <https://gallery.intage.co.jp/seikatsushadb-9/> (2024年3月31日最終アクセス)
- 岩本健良 2024 「ジェンダーと統計——LGBTQの人権保障とジェンダー統計の充

- 実の両立のための性別情報の扱い』『都市計画』73(1), 34-37
- 岩本健良・平森大規・内藤忍・中野諭 2019 「性的マイノリティの自殺・うつによる社会的損失の試算と非当事者との収入格差に関するサーベイ」JILPT ディスカッション・ペーパー 19-05 <https://www.jil.go.jp/institute/discussion/2019/19-05.html> (2024年3月31日最終アクセス)
- 釜野さおり 2020 「特集に寄せて(性的指向と性自認の人口学—日本における研究基盤の構築)」『人口問題研究』76(4), 439-442
- 釜野さおり 2022 「社会調査にSOGI項目を含める——Why & How」ジェンダー統計の観点からの性別欄検討ワーキンググループ報告資料 https://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/wg-seibetsuran/sidai/pdf/wg07_4.pdf (2024年3月31日最終アクセス)
- 釜野さおり 2024 「ダイバーシティ・インクルージョンと社会調査における〈性別〉——ジェンダー統計とクィア方法論の連携」『社会学評論』74(4), 660-676
- 釜野さおり・岩本健良・小山泰代・申知燕・武内今日子・千年よしみ・平森大規・藤井ひろみ・布施香奈・山内昌和 2023 「家族と性と多様性にかんする全国アンケート結果概要」国立社会保障・人口問題研究所ホームページ <https://www.ipss.go.jp/projects/j/SOGI2/ZenkokuSOGISummary20231027R1.pdf> (2024年3月31日最終アクセス)
- Klawitter, M. 2015 Meta-Analysis of the Effects of Sexual Orientation on Earnings. *Industrial Relations: A Journal of Economy and Society*, 54(1), 4-32
- LGBT法連合会 2019 「性的指向および性自認を理由とするわたしたちが社会で直面する困難のリスト(第3版)」LGBT法連合会ホームページ <https://lgbtetc.jp/wp/wp-content/uploads/2019/03/%E5%9B%B0%E9%9B%A3%E3%83AA%E3%82%B9%E3%83%88%E7%AC%AC3%E7%89%88%EF%BC%8820190304%EF%BC%89.pdf> (2024年3月31日最終アクセス)
- 前之園和喜 2022 「アンケートで性別をどのように聞くべきか」『日本世論調査協会報「よろん」』129, 11-20
- 宮下公一 2022 「性別質問の選択肢に関する調査」『日本世論調査協会報「よろん」』129, 4-10
- 西尾優希・李美蘭・遠藤裕乃 2023 「『心理学研究』誌における『性別』の取り扱いについての予備的研究」『発達心理臨床研究』29, 1-13
- 杉橋やよい 2023 「ジェンダー統計——社会を把握するツール」長田華子・金井郁・古沢希代子編『フェミニスト経済学——経済社会をジェンダーでとらえる』有斐閣

Is Everyone Selecting “Other” for the Gender Question a Sexual/Gender Minority?

A Queer Demographic Analysis to Improve Gender Statistics

HIRAMORI Daiki

(Hosei University)

From the standpoint that including the perspective of sexual orientation and gender identity (SOGI) is significant for improving the accuracy of gender statistics, this paper reviews methodological studies for the measurement of SOGI in population-based surveys in the field of demography in Japan. It also presents the latest results of an experimental web survey that indicated about half of the respondents who chose “other” as their gender turned out to be cisgender women. The limitations of using the word “other” as a third gender option, in addition to “man” and “woman,” are further discussed.

Keywords: gender statistics, queer demography, gender measure, sexual and gender minorities (LGBTQ)